

ベルにまでは、効果的に働きかけることはできなかったと言える。

看護職は、複数の業務を同時にこなす、的確な判断を要求される頭脳労働・肉体労働・心理労働と性質の異なる業務をこなさなければならない。しかも、不規則な勤務体制でそれ自体がヒューマンエラーのリスクを高めていると言われている。その中で、事故を防ぐ方法である指呼確認が確実に行われていない事実が明らかとなった。ミスへの怖さの認識不足が、事故を招くリスクを高めていると言われている。指呼確認しなくても多くの場合は事故が起こらない。しかし、確実な指呼確認

をしなければ事故が起こる危険性があることを周知する必要がある。ルールを頭で覚え、身体でも覚える訓練を繰り返して指呼確認を徹底させていく。私たちは、ヒューマンエラーを起こしやすい環境で勤務しており、ミスの怖さを認識する必要がある。指呼確認を習慣化するためには、①指呼確認の方法を理解する事、②指呼確認の有効性を理解する事、③確認不足による事故を共有する事があげられる。耳と目・身体で覚えるために、指呼確認のチェック項目を、朝全員で読み上げていくのも1つの方法ではないだろうか。

## 看護必要度と記録について

看護部看護必要度プロジェクト 松村 葉子 鍋田 きぬこ  
石川 睦子 武田 恵子

### I. はじめに

看護必要度とは「入院患者に必要とされるべき看護の必要量」であり、看護必要度調査は患者の生活の質を高める医療の実現のために実施される。

当院では7対1入院基本料の取得に向けて、平成20年5月より入力による看護必要度調査を開始した。

診療報酬における点数評価との整合性を図り、看護必要度の評価結果の妥当性と信頼性を担保するため、1. 看護必要度の評価項目の定義の明確化、2. 定義を厳格に守って、調査ができる評価者の育成、3. 調査項目の評価が適正かつ否かを判断できる記録の整備が条件となる。

しかし、毎日の患者の状況等に関する記録を診療録看護2号用紙に毎日記載することは困難な現状がある。そこで確実かつ簡便に記録ができ、患者の状況や実施内容が一目でわかる看護必要度記録用紙を試行し若干の考察を加えたので報告する。

### II. 研究方法

1. 研究期間：平成21年7月～9月
2. 研究方法：看護必要度記録用紙試用1ヶ月後にアンケートを実施
3. 研究対象：病棟看護師250名看護師長11名
4. 倫理的配慮：看護部倫理委員会において承認

された。

### III. アンケート結果及び考察

アンケート結果

1. 看護必要度調査時間の設定はほぼ適当である。
2. 毎日記録・監査ができず、正確なアセスメントができていない。
3. 記録・監査に要する時間は1～3分以内に80%以上の人が出来ている。
4. 記録用紙の書式はほぼ現行を基本にしてよい。
5. 記録用紙を患者情報の把握に活用している看護師は20%以下であったが、看護師長は73%が活用していた。
6. その他の意見から、看護必要度調査の必要性や記録の重要性を認識できていない。
7. 現行の調査項目だけでは人員の適正配置の指標にはならない。

今後の課題としては以下のことが挙げられる。

1. 看護必要度調査の必要性や記録の重要性について周知する。
2. 正確なアセスメントや項目の理解ができるように研修による学習と監査機能の強化を行う。
3. 記録を簡単に記入できるチェックシートの改良と患者の状態把握への活用を図る。
4. 人員の適正配置に向けた調査項目の再検討を行う。

#### IV. ま と め

今回、确实かつ簡便な記録ができ、患者の状況や実施内容が一目でわかる看護必要度記録用紙を

試行した。その結果80%の人が1～3分以内に記録が出来、簡便な記録となった。今後はより正確な記録とすることや適正配置に繋げていくための活用についてさらに検討していきたい。

## エンゼルケアの充実を目指して — グリーフケアとしてのエンゼルメイク研究会活動報告 —

エンゼルメイク研究会 牧野仁美 横地恭子  
杉山美智子 村松美代子  
山地啓子

#### I. はじめに

エンゼルメイクとは、医療行為による侵襲や病状などによって失われた生前の面影を、可能な範囲で取り戻すための顔の造作を整える作業や保清を含んだ「ケアの一環としての死化粧」である。そこには、ただ単に容貌・装いを整えるだけでなく、家族への援助・家族の悲嘆を考慮したグリーフケアの意味合いも併せ持つケアとして考えられている。

平成13年に小林光恵氏がエンゼルメイク研究会を立ち上げて以来、全国各地でエンゼルケアを見直す病院が増えている。そのような中で、私達も「看取りの看護の締めくくりとしてきちんと死後ケアを行う」という目的で、有志を募り「グリーフケアとしてのエンゼルメイク研究会」を立ち上げた。発足後2年間の活動をまとめ報告する。

#### II. 活動の実際

定例会を2ヶ月に1回開き、各病棟でのエンゼルケアの事例報告や検討、エンゼルメイクの手順書作成やメイク・着付け等の実技演習、葬儀業者との情報交換等を行った。そして、そこで出た意見を病院側へ提案したり、研究会開催毎に会報を作成し病棟・外来に配布をしたり、エンゼルケアへの理解やスキルを広める活動を行った。

その結果、遺体の変化がよくわかったことにより、エンゼルメイクスキルの向上が図れた。そして、病院から帰った後の状況を理解した上で家族への関わり方やその人らしさを大切にすることなど、エンゼルケア全般の充実も図れてきている。また、各部署でもそれぞれの状況にあわせた取り

組みをしていることがわかり、よりよいケアをしたいというスタッフの前向きな姿が感じられる。

しかし、私達が行っているケアに対して一般の人々の認識が薄いことなどの課題もみえてきた。そこで、私達が行っているケアを家族に知ってもらい、スムーズにエンゼルケアが行えるためにはどうしたらよいかの検討を重ね、現在亡くなられて退院する際に家族に渡すパンフレットを作成している。

#### III. 考 察

小林氏<sup>1)</sup>は「必要な情報を得て、エンゼルケア全体の流れやそれぞれの内容を検討することは、充実したケアの締めくくりになり、それが人として人の命を大切に証にもなり、ナースに充実感をもたらします」とよりよいエンゼルケアの検討が患者や家族にとってのみでなく、私達ナースにとっても大切なことであると述べている。研究会の活動を通し、エンゼルメイクや家族との関わりを意識的・意図的に行うようになったことで、以前に比べて不安感も少なくケアを行うことができています。また、家族からその方らしい顔が亡くなくても続いていたこと、人としての尊厳が守られたことへの感謝の手紙もいただき、私達の活動が確実にグリーフケアにつながっていたこともわかり、活動の励みになっている。

#### IV. おわりに

今後もエンゼルケアの充実を目指して研究会の活動を続けて行きたい。最後に、この活動に賛同し参加していただいた方々、ご協力いただいた方々に深く感謝し報告を終る。